広野町イメージキャラクター
「ひろぼー」

編集・発行：広野町復興企画課

[ホームページ] http://www.town.hirono.fukushima.jp/

ふくしまから
はじめよう。
Future From Fukushima.

福が満開、福のしま。

国際シンポジウム
『広野町から考える』

～避難先からの“幸せな帰町”に向けて～

From “Early Return” to “Happy Return”

報告書 －概要版－

福島県 広野町

国際シンポジウム
『広野町から考える』
～避難先からの“幸せな帰町”に向けて～
From “Early Return” to “Happy Return”

広野町は、東京大学大学院新領域創成科学研究科と共催で、平成 26 年6月 15 日（日）、広野町公民館で国際シンポジウム「広野町から考える」～避難先からの“幸せな帰町”に向けて～を開催しました。会場には約 130 名の観客が訪れ、大津波やハリケーン（台風）などによって故郷を追われた被災者の実態に詳しい海外の研究者と、広野中学校の生徒３人や女性の町民が「幸せな帰町」についてパネルディスカッションを行いました。

最後に参加者全員で『広野』からのメッセージを発表しました。

平成 26 年6月 15 日

『広野』からのメッセージ

この度、私たちは広野町に集い、平成 23 年３月 11 日の東日本大震災とそれに引き続く東京電力福島第一原子力発電所の事故により避難を余儀なくされた人たちが、広野町への帰町を自ら選択されるような“幸せな帰町”を実現するために、何が求められるのかを内外の専門家たちと一緒に考えました。

その上で、私たちは次のような共通の理解に達しました。

1．昨日（6月 14 日）、高久仮設住宅、常磐迎仮設住宅の集会所で避難者との対話集会を開催し、次のことが最も重要であると学びました。

家族の中で意見を交わす、町民同士が素直に話をする、町民と行政が本音で話をすること。

2．本日のパネル・ディスカッションを通じて、次のことが重要と学びました。

1）あらゆるステーク・ホルダーがお互いに本音の声を交換できる場をつくること。

2）時間をかけ、市民が主体的に関わるなかで事業などを進めること。

3．この度、世界の避難者や難民の実態を具体的に聞き、あらためてその多様な拡がりを学びました。一つ一つの事例ごとに、異なる課題を抱えているようにみえるものの、その根底には、例えば世代間の対話の重要性など、共通する要素も数多くあると受け止めました。

このため、今後ともこのようなシンポジウムを繰り返し広野町で開催することは、単に FUKUSHIMA（福島の原発事故の被災地）のためだけでなく、世界の避難者の問題に取り組むうえで大きく貢献できることを知りました。

4．“幸せな帰町”と復興を図るためには、子育て世代の視点を取り入れていくことが極めて重要と改めて学びました。そして、その実現には、「子育て世代の女性」が、主体的に参画し、活発に活動されることが肝要であり、また、それを可能にする環境を整えることの重要さを知りました。今後はその実現に向けてより一層の努力をいたします。

5．この度のシンポジウムの開催を機に、広野町が内外の知の交流の場となるように、文化豊かで感性に溢れた町づくりを目指し、広野町のみならず FUKUSHIMA（福島の原発事故の被災地）全体の復興に向け、世界の英知を結集できるように全力をつくします。

私たちは、本日のシンポジウムで得られた結果を踏まえ、それぞれが自分で出来ることについては、その実現を目指して取り組んでいくことといたします。

また、この国際シンポジウムでは、世界の多様な事例を学びあうことが極めて有意義であることを学びました。このため、この広野町に集った私たちは、本日の国際シンポジウムを踏まえ、さらに発展させるべく、出来る限りの努力を続けます。

Ⅰ．基調講演

町民の皆さんが一刻も早く、広野町に帰りたいと切望されるような帰還となることが大切。

東京大学大学院新領域創成科学研究科教授　中山（なかやま）　幹康（みきやす） 氏

世界人口の１％は「難民」や「国内避難民」です。「国内避難民」は世界で約 2,500 万人、その１％は東日本大震災による避難者です。難民や国内避難民はいずれ帰還するという前提で援助が行われます。しかし、現実には帰還を望まない人々が、少なからず存在しています。帰還を望まない避難者はなぜ生じるのか。何が幸せな帰還を実現するために必要なのか。などを明らかにするため、国際共同研究「帰還を望まない避難者」という研究を始めました。

早期帰還が必ずしも幸せな帰還とは限らないと、私たちは認識しています。避難先から一刻も早く広野町に帰りたいと、町民の皆さまが切望されるような幸せな帰還であることが大切との認識の下、例えば帰還を躊躇しておられる多くの子育て世代の女性が抱えておられる懸念は、どのようにして払拭できるのか。専門家と町民の皆さんとの相互の交流を通じて、幸せな帰還に不可欠な要素を抽出し、それを社会に向けて発信したいと思っています。

Ⅱ．パネルディスカッション

●コーディネーター

法政大学　人間環境学部教授　藤倉　良 氏

●海外研究者

アメリカ：環境法研究所　国際部長　Carl Bruch （カール ブルック）氏
インドネシア：アンダラス大学　経済学研究所所長 Syafruddin Karimi（シャフラディン カリミ）氏
シャクアラ大学　経済学部教授 Said Muhammad（ザイド モハマッド）氏
スリランカ：モラツワ大学　工学部上級講師 Jagath Manatunge（ジャガト マナトウンゲ）氏

●広野町民

広野中学校（３年生）：渡邉　金四朗さん、根本　妃奈さん、大和田　瑠華さん
子育て世代：阿部　理恵さん、馬上　直子さん
シニア世代：猪狩　明子さん

広野中学３年生の発表

復興はビジネス。
安心して元の生活ができる町にしてほしい。

渡邉（わたなべ）　金四朗（きんしろう）さん

渡邉さん

放射線の影響や治安の不安が理由というのは、自分は違うと思います。一番の理由は、便利か否かということだと思います。来年から新しい高校が開校するという話があるのですが、来年はまだ早いのではないかと思います。もうちょっとスーパーとか病院とかつくってからでないと人は来ないだろうし、人が来ないところで自分たちが高校生活を送るのもなんか寂しいです。やっぱり復興はビジネスということだと思います。

根本さん

双葉郡のために全国各地から広野に作業員の方が来ていてとても感謝しています。でも全国各地からどんな方が来ているかも知れず、受け入れていることが少し怖く、抵抗があります。１人で外で運動をしようと思っても、あまり親は許してくれません。前の広野ではこんなことはありませんでした。安心して毎日過ごせるようにパトロールを増やしたり、町を全体的に明るくすることが大事だと思います。

根本（ねもと）　妃奈（ひな）さん

大和田（おおわだ）　瑠華（るか）さん

大和田さん

今の広野は治安や除染の問題があり、子供が１人で外に出かけたり、普通に学校に登下校したり、友達と遊んだり、集まって騒いだりといった当たり前のことができないのです。子供たち全員が、思いっきり運動や遊びができる場所をつくってほしいと思います。また、それを他の学校も使ってくれたら、広野中学校とも関わりができ、いい流れができて中高連携の話もうまくいくのかなと考えています。

中高一貫校ができるので、中学生は２学期より今の校舎から小学校の校舎に移ることになっています。私たち３年生は、震災後小学校の卒業式も、中学校の入学式も本来の校舎でできなかったので、中学の卒業式ぐらいは、高校ができても体育館だけでも貸してもらって立派な卒業式をしたいので、そこをお願いできればうれしいです。

避難生活は、貴重な経験。子育て世代の町民が本音で話し合える交流の場が必要。

阿部（あべ）　理恵（りえ）さん

阿部さん

私は、この町で育ち、この町で２人の子供を育てている広野町が大好きな母親です。振り返ると、震災以降の生活の中で、震災があったから経験できたこと、出会えた人々、楽しかったこと、辛く悲しかったこと、全て自分のストーリー、人生として受け入れられて、全てがあったおかげで今の幸せがあると今は思えるのです。

2012 年８月、私たち家族は、広野町での学校再開を機にこの町に帰って来ました。まもなく２年が過ぎますが、家族全員元気に楽しく暮らしています。帰って来たばかりの頃の私の口癖は、「大丈夫、何とかなるよ」でした。生活環境も教育環境も決して十分とは言えません。満足とは言えなくても不足することはなく、困ったこと、お願いしたいことはいろいろと聞いていただきながら生活してきました。

私たち、そして私たちよりも若い世代のお父さん、お母さんたちは子供たちを何とかしてあげるパワーがあります。そこで町長さんはじめ行政の方々にお願いしたいのは、直接、町長さんなどにフレンドリーにお話を聞いていただけるような場、本音で話し合える交流の場を常に開いてもらいたいということです。いつでも相談できる、何とかしてあげられるという安心感を持てるのではないでしょうか。

また、震災から３年がたった今、私たち子育て世代が町に帰って来るのには、タイミングというものが重要です。子供の学校のこと、仕事のこと、それぞれの家族にそれぞれの事情があるので、例え住生活の環境が整っていても、すぐに簡単に帰って来ることはできないと思います。私は今、町に戻り自分の家で家族が揃って何気無い日常を送れていることに幸せを感じています。そのタイミングが来て、まだ少し迷いがあったなら、「大丈夫、何とかなるよ。」と思ってみて下さい。そして町に戻れたら、家族で力を合わせて笑顔で生活していれば、その帰町が「幸せな帰町」と呼べるようになると私は思います。「幸せな帰町」は誰かに準備してもらうものではなくて、私たち自身がどのように生活して、どのように感じていくかではないでしょうか。これから少しずつ、この町で幸せを感じてくれる家族が増えていくことを願っています。

馬上（もうえ）　直子（なおこ）さん

馬上さん

私には小学校４年と２年、幼稚園の年中と２歳の子供４人、夫を合わせ６人家族で暮らしています。震災後、神奈川に避難し、今年４月に３年ぶりに広野町に戻ってきました。広野に戻って思ったことは車の交通量は多いけれど、町を歩いている人が少なくて寂しいなというのが率直な印象です。神奈川では子供たちはボーイスカウトやテニス、体操教室などへ徒歩や自転車で通っていました。私たちが広野に戻るにあたって、子供たちの未来を考えると悩み、主人と何度も話し合いました。神奈川にいれば子供たちの将来のための選択肢がたくさんあると思ったからです。子供たちも友達との別れや慣れた学校を離れるのは嫌がりました。そして便利なことなど悩むこと、心配なことはたくさんありました。４月か

ら子供は広野小学校に転入して、学校に行きたくないと言ったことは一度もなく、友達もできて楽しいと言っています。心配していたのは親だけで、子供の順応性にとても驚きました。そして神奈川では社宅だったので、静かにするよう怒ってばかりだったのですが、広野の自宅に戻ってからは伸び伸びとしています。広野町のみかんクラブでテニスもまた通い始めたり、近所の公園で自転車に乗ったり、鬼ごっこをしたり、庭でバーベキューができたり、ここだからできることもたくさんあり、良かったなと思っています。そして楽しそうな子供たちの笑顔を見ると、便利な生活にしがみついていたのは私で、子供たちにとってこれで良かったんだなと気づかされました。私たち家族にとってこの３年間の避難生活は、嫌なこと、大変なこともありましたが、とても良い経験でした。素晴しい経験と人との出会いや別れ。今後の人生でも、子供たちにも忘れることができない貴重な３年間だったと思います。

最後になりますが、広野の子供たちはとても元気で優しくて、本当に子供らしい子供たちだなと思います。この子たちがもっと笑顔になれるように、町長さんや皆さんに聞いていただけるような場、私たちの世代が本音で話し合える交流の場が設けられるといいなと思います。

シニア世代の発表

広野町に不足しているもの、住民が一緒に参加してつくり上げていきたい。

猪狩（いがり）　明子（あきこ）さん

猪狩さん

私の家族が地元に戻ったのは、役場が湯本から広野へ移ったその同時期だったと思います。孫は３人いますが、小さい子は３歳でした。その頃は除染も始まっていなく、放射能の悪影響も心配でした。それで業者に頼み、庭の植木を根こそぎ引き抜き、土を入れ替えました。その後も役場から線量計を何回も借りて来て、測りながら線量が高いところは圧力洗浄機で除染し、線量も安心して暮らせるまでに下げることができました。広野町は特にこれと言った特産物はありません。しかし温暖な気候でみかんのできも良く、甘酸っぱくてとってもおいしいです。田や畑はもちろんのこと海も山もあり、季節が変わるごとに風景も変化し、帰ってからの約２年間の暮らしで特に不便さは感じておりません。

私は持病を持っているものですから、病気のつらさを何年も経験してきました。それで特に健康面については留意して暮らしているつもりです。最近、パークゴルフやグランドゴルフにも参加し、時間のあるときには練習に出向いて行っています。また広野小・中学校の同級生とも週に１回集まってはパークゴルフを楽しんでいます。よその町やいわき市からもやりに来て、大会ともなると 100 人以上の人が集まって格好よくプレーしています。このように広野に住んでも、私は充実した日々を過ごすことができています。孫たちとのおしゃべりは何とも言えない、心がほんわかと温かにしてくれます。買い物は近くの小さなスーパーやコンビニエンスストア、直売所を利用したり、足りないものはいわき市にて求めております。

私の友達の中にも広野町に早く戻り、草花やいろいろな季節の野菜を楽しみで作っています。時々遊びに行っては、ごちそうになったりしています。これからの町づくりには、職場の確保、利用し易い図書館、大人も子供も楽しめる公園、商店等が是非ほしいと思っています。

これらを実現していくためには、行政だけに頼るのではなく、町民も一体となって意見を出し合い、一歩一歩復興に向かって行くことが大事ではないかと考えています。

ディスカッション

ブルック氏

住民参画型の計画づくりが大切ですね。早く事を前進させようとせず、住民をディスカッションのプロセスに取り込んでいくべきと思います。

マナトウンゲ氏

若い人や高齢者のニーズにも応えられるように、慎重にことを運ばなければいけないでしょう。高齢者はこれまでの過去の広野をつくってきた人なのです。若い世代を育て上げると同時に、高齢者の面倒もちゃんとみていかなければいけない、この二つを達成しなければいけないと思います。

カリミ氏、モハマッド氏

前より魅力ある広野町に復興することが、幸せな帰還を促す上で重要と思います。

藤倉氏

先ほど会場からご質問のありました、不幸の中にも幸せを感じるようになったきっかけというのはいったい何だったのでしょうか、大人の女性の方々３人にお答えいただければと思います。

阿部さん

震災の中で幸せを見つけられたというよりも、震災があったからこそたくさんの方々と出会え、たくさんの支援をいただいたことに感謝の思いをすごく持つことができ、今現在私は間違いなく幸せに暮らしているのです。何もなくて広野で普通に暮らしていたら、あの経験はできなかったのではないかということを冷静に、明るく受け止めることができているのではないかなと思います。

馬上さん

私自身は震災があって、あまり不幸だとは思わなかったのが本当のところです。私も生まれも育ちもずっと広野町だったので、別に何の不満もなく育ってきたのです。この年になって初めて広野町を出て少し都会のところに行ったので、帰って来てから広野町の不便さというものを感じてしまったのです。でも戻って来てやっぱり家族がみんな一緒にいられるという、こんな当たり前なことが幸せなことなのかなと思いました。物理的なものではなくて、精神面ですごく今感じているので、胸を張って「幸せです」と言える今があるという、そんな感じです。

猪狩さん

現在私は幸せに暮らしています。家族みんなが健康で、孫や子供はすぐ近くに住んでいて、お互いに困ったときには助け合っています。避難しているときも幸いそんなにひどい体験もしないですみました。不幸だなと感じたことはあまりありません。幸、不幸かは、各個人の考え方や感じ方次第だと思います。

藤倉氏

今日のお話を聞いていまして、一番私の心に響いた言葉が、「本音で話を聞いてくれる場所が欲しい」ということです。これが、町民あるいは現在避難している方々の本当のお気持ちなのではないかと思います。行政に何かを言うだけではなく、広野の人だけでなく、広野の外にいる人も自由に話ができて、意見の交換ができる場所が必要ではないかということです。もちろんインフラも経済も大事です。でも、拙速で始めてはいけない。みなさんの意見を十分に聞いて、計画を練り上げてから始めることが大事なのではないかなと、私は今日の議論を聞いていて思いました。

本日は、ありがとうございました。